

II 浅海増養殖試験事業 3 魚病検査

小 川 健・木 村 創

目 的

病魚の診断・検査を行い、海面魚類養殖における適切な病害対策を指導する。

方 法

持込等診断依頼のあった病魚について、常法により細菌・寄生虫検査を行い、必要に応じて分離菌の薬剤感受性を調べた。

結 果

魚種別・月別病魚検査件数を表1に、県内魚病分布を図1に示した。

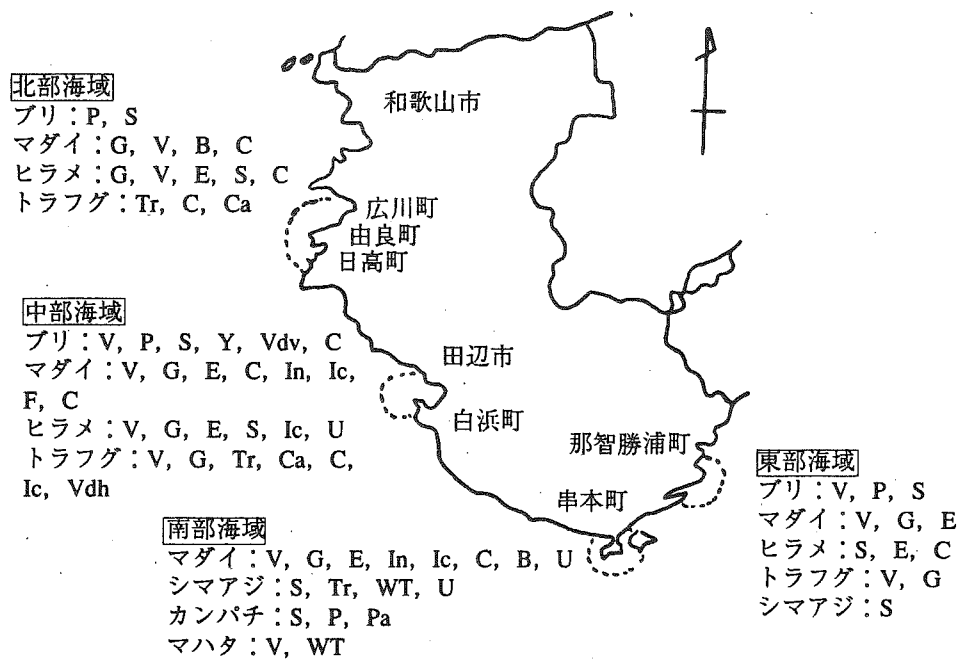


図1 県内魚病分布

V：ビブリオ病	P：類結節症	S：連鎖球菌症	G：滑走細菌感染症
E：エドワジェラ症	In：腸管白濁症	Ic：イクチオボド症	Tr：トリコディナ症
C：白点病	Ca：カリグス症	B：エラムシ症	Pa：血管内吸虫症
Y：黄だん症	Vdv：上弯症	Vdh：側弯症	F：餌料性疾患
U：不明	WT：水温障害		

表1 魚種別・月別病魚検査件数

魚種	病名	1990年												1991年			計
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3月				
ブリ	ビブリオ病				2								1				3
	連鎖球菌症	2			5	1	3						1				12
	ク・上弯症			1									1				1
	白点病							1									1
ブリ	黄だん								2								2
	上弯症				1												1
	計	2	0	1	8	1	3	1	2	0	2	0	0				20
	マダイ	ビブリオ病	2												1	1	
滑走細菌感染症				1													1
ビブリオ・滑走細菌合併症				1													1
エドワジェラ症								1					1		1		3
腸管白濁症		2															2
ビブリオ病・トリコディナ症						1											1
イクチオポド症		2															2
白点病							1	3	1								5
エラムシ症									1			1	2	2			6
粘質細菌塊				1													1
餌料性疾患															1	1	
不明	2	2	1	1												6	
計	8	5	1	1	1	2	3	2	0	2	3	5				33	
ヒラメ	滑走細菌感染症	3	1												2		6
	ク・ビブリオ合併症			1	1												2
	連鎖球菌症	1				2	2	1									6
	エドワジェラ症				1		1								1		3
	イクチオポド症		1														1
	不明										2						2
計	4	2	1	2	2	3	1	0	2	0	0	3				20	
シマアジ	連鎖球菌症	1												1			2
	トリコディナ症								1								1
	低温障害														2		2
	不明	1				1	1								1		4
計	2	0	0	0	1	1	0	1	0	0	1	3				9	
カンパチ	連鎖球菌症							1									1
	類結節症									1							1
	血管内吸虫症											1		3			4
	不明					1											1
計	0	0	0	0	1	1	0	1	0	1	0	3				7	
トラフグ	滑走細菌・ビブリオ合併症			1													1
	イクチオポド症			1													1
	トリコディナ症	1			1			1									3
	カリグス症				1												1
	側弯症										1						1
計	1	0	2	2	0	0	1	0	1	0	0	0				7	
マハタ	ビブリオ病	1															1
	肝臓障害								1								1
	温度障害					2											2
	不明						1										1
計	1	0	0	0	2	1	0	1	0	0	0	0				5	
イセエビ	不明											1					1
アユ	ギロダクチルス症	1															1
ウナギ	細菌感染症			1													1
合計		19	8	5	13	8	11	6	7	3	6	4	14				104

本年度の検査件数はブリ20件、マダイ33件、ヒラメ20件、シマアジ9件、カンパチ7件、トラフグ7件、マハタ5件、そのほかイセエビ、アユ、ウナギ各1件、計104件であった。ブリでは連鎖球菌症が最も多いが、尾鰭が上向きになるように躯幹部後半が変形する上弯症や、昨年四国・九州でみられていた黄だん症も持込まれた。

マダイの件数は33件と多いが、約半数は種苗生産過程のもので、冬から春に集中している。

シマアジの低温障害は那智勝浦町の養殖場でみられたもので、2月中旬から3月初めにかけて、当海域では希な12～13℃台の水温が続いたためである。

カンパチでは高知県から移入した種苗で血管内吸虫症が発生し10,000尾のうち約2,000尾が斃死した。種苗は外国産である可能性が大きい。

トラフグ0年魚でみられた側弯症は、いわゆるハマチの曲がりと全くよく似た症状で、小割網内の魚のうち約10%にみられたが、とくに斃死はなかった。脳内には粘液胞子虫もみられず、原因は不明であった。

マハタは計5件の持込みがあったが、いずれも同一業者で、種苗は韓国産のものを四国の業者から購入したもので、ビブリオ病や肝臓の著しく肥大した病魚もみられたが、特徴的な症状を呈する病魚はなく、原因が不明瞭なものが多かった。

このほか、ウナギは日置川漁業協同組合から持込まれた天然魚で、症状から何らかの細菌感染症が疑われた。